

夢見の体、あるいは体の夢を見ること－認知症高齢者の世界への非還元的接近

藤波努（北陸先端科学技術大学院大学 ライフスタイルデザイン研究センター）

はじめに 「老いと技術」

情報通信技術を用いて高齢者の見守りや介護を支援する研究を十年余り続けてきた。研究を始めたきっかけはグループホームを経営されている方が認知症の方をよく理解したいと相談を持ちかけてきたことによる。認知症の方は言葉で自分の気持ちや希望をうまく表現できないから、言っていることや行動を観察し、受け手が本意を推察する必要がある。我々はその頃から身体知というコンセプトで人間の巧みな動きを研究し始めていたので、その身体知研究の方法論が認知症高齢者の行動理解に適用できるのではないかとの期待から研究が始まった。

最初はビデオカメラをグループホームに導入し、そこで暮らす高齢者の方々の振る舞いを観察した。撮影した画像を複数枚組み合わせてストーリーをつけることで行動の意味を推察した。たとえば玄関から他人の靴を自室へ持つて引き出しにしまう居者の行動を一部始終撮影し、そこに現れた介護者がどのように受け止められ、話しかけが理解されるのかを記述した。

現代版紙芝居のようなものである。入居者が玄関にやつてくる。「ここに大切なものが放置されている」と入居者はつぶやく。「なくなってしまうと大変だから部屋に持つて帰ろう」と考える。部屋に持つて帰つて引き出しをあけようとしたところで介護者が現れ、「大切なものだから私が預かっておきましよう」と声かけする。「これはありがたい、親切なひとだ」と入居者は感謝し、靴を手渡す。めでたし、めでたし、と終わる。

事態をいかにして認知症の方の視点で理解するかがテーマであつた。事例を積み重ねることで、介護者らが認知症の方々の行動を的確に理解できるようになるとの期待があつた。過去形の表現となるのは、認知症の方の心の内を推察する事例研究それ 자체が難しいという内的要因に加えて、姿形を撮影するのはプライバシーの侵害であるといった外からの指摘による。プライバシー侵害が是認できるかどうかは、引き替えに生み出される益とのバランスによるが、「映像など見なくとも理解できるのが介護のプロだ」と業界の有力者が主張すれば抗弁するのは難しい。

続いて姿形を写さないで入居者の行動を把握することを試みた。屋内床下にアンテナを配置し、スリッパに仕込んだタグを検出することで、入居者の居場所を記録するものである。玄関に近づいたのが徘徊傾向の強い方であればアラームを鳴らすなど、細かい設定ができるので介護者の負担が軽減された。プライバシーもさほど侵さず、結構な仕組みと思われたが、スリッパを壊したり、アンテナが埋め込まれた床をほじくり返したりする入居者がいて長くはもたなかつた。

それでも二年半ほどはデータが集められて、貴重な発見があつた。ひとつは季節的な行動の変動で、当初は寒い冬に行動レベルが落ちるだろとうとおもつていたのが真相は逆で、暑い日が続く夏に行動量が低下していた。冷房はしつかり効かせた方がよいとわかつてよかつた。年寄りには冬の寒さよりも夏の暑さが応える。データでそのことを示した例はないので介護業界にある程度、貢献できただろう。

終末期の見守り

二年半に渡るデータ収集の期間中、ほかに転倒による骨折が一件と、老衰によつて亡くなられた方が一人いた。骨折された方の行動傾向を分析すると、行動量はそれほど変わらないものの、転倒する一ヶ月くらい前から行動パターンが変化するのが見て取れた。それまでは屋内のいたるところを動き回っていたのが、ある時点から行動範囲が狭まり、自室とトイレの往復くらいになつたのである。不調をなんとなく自覚して行動を自制したのかと推察された。こういった行動パターンの変化が普遍的なものであれば、事前に注意して事故を防止できるので益は大であろう。

老衰の方については、亡くなれる三ヶ月くらい前から緩やかに行動量が落ちていったことがわかつた。一時的に回復するときもあつたが、大局的には行動量が落ちていく。最後の一月は行動量の低下が特に顕著で、この時期には周囲の誰もが最期の時を予感したであらうと思われた。この傾向が普遍的なものなら、家族や縁者に注意を促せるし、介護する側にとつては終末期介護に入るべき時期がわかり、心つもりができるといった益がある。終末期介護には手当がつくるので、申請しやすくなるのは介護する者にとつてありがたいことではなかろうか。

とはいって、終末期に入ったという判定を誰が下すのかなど、具体的なことを考え出すと二の足を踏むのも確かである。家族に誰がどう話すのかも問題だろう。死について話しあうことはいろいろ難しい。本人も含めて、誰にとつても益があるとわかついても、死が絡んできた時点で対話がとまる。障壁は技術にではなく、我々の心の内にある。

というようなことを同じく高齢者の見守り技術の開発・普及に取り組んでいる企業の方々に話したことがある。彼らは事業として高齢者の見守りに取り組んでいるので持っているデータが比べて桁違いに多い。死期が近いといったこともおそらくデータから判断できると話したところ、そういう傾向は何となく見えていたことであつた。とはいって死について語り合うことは難しいとも。しかし、最近葬儀屋から引き合いが来ていて、どう対応したものか判断つきかねていると教えられた。身辯整理の作業負担軽減が趣旨らしい。

彼らも我々も「業界」対応には苦労しているので、技術的に可能でもこれをやつたら医師会に突っ込まれるだろうとか、これは介護者団体から反対が出るだろうなということはおおよそ予想がつく。そこからの経験で死期予測はクレームがつきにくいと思われた。

今のところ、どこの業界も事業にしようとは思っていないだろう。特殊清掃業者は仕事が減つて困るかもしれないが、臭気に悩まされつつ床に拡がった体液を拭き取るより、生前に依頼を受けて部屋の中を片付ける方が精神衛生上よいと受け止めてくれるのではないか。

各地の自治体が最低限これだけはなんとかしたいと思つていているのが高齢者の孤独死である。親類縁者と没交渉の者が人知れず亡くなると後片付けが自治体に回つてくる。死後すぐに発見できればよいが、何ヶ月も経つてから発見したとなると後片付けの大変さは想像を絶する。そこにビジネスチャンスがあるわけだが、さて誰が手を付けるのだろうというところで一同顔を見合わせて技術交流は終わつた。死を金儲けのネタにするとなれば相応の批判を覚悟しなければならない。批判をはねのけるだけの信念を我々が抱けるかどうかが問題である。

延命に関する世間の見方

先日、老衰をテーマとしたテレビ番組を見ていたら、栄養の摂取状態が死期

の五年ほど前から徐々に悪くなる（吸収できなくなる）というグラフが出てきて、そんなに前から回復の可能性があるのか、死が避けられない事態なのか判別できることに驚いた。健康に生きた人が衰えて死ぬことについて、医学的にそのような知見が得られていることは喜ばしい。行動をみていれば三ヶ月くらい前に予測できるだろうと考えていたが、自分の想像を超えて技術が進んでいた。

番組に登場する医師や家族らが、悲しみながらも達観した様子で老人の死を受け入れるのは感動的であつた。映像の魔術もあるかもしれない。一連の解説で老衰の人に（経管栄養など）延命治療をしても効果がないと報道していたが、経管栄養で効果が出て生き延びる人も少なからずいるので、この報道が遠因となつて適切な処置を受けられなくなる人が出てきたら問題ではないかと思った。というのも、ここ数年、学生と一緒に胃瘻利用の実態を調べていたからである。歳を取つて衰えている状況でも、人はいろいろな事情で予想外に体調が悪くなることがある。そこで適切な処置を受けることで回復する場合もある。回復といつても衰えが止まるわけではないが、以前のように穏やかに衰えていく生活が取り戻せる。統計的には延命治療に効果がないとの結論かもしれないが、個別事例をみると何が「延命」措置なのかは簡単に判断できないと気づく。「延命」とは特定の価値観を織り込んだ危険な表現である。

「命を延ばす」という表現の裏に「人工的な手段で」「自然の流れに反して」「無理に」生き延びさせるといったニュアンスが潜んでいる。ここには技術に対する不信がいくらか含まれていることに注意されたい。人工的な手段を用いてはいけないのか？と敢えて問いたい。何が自然で何が人工的なのかは多分に社会的な慣習や文化的にすり込まれ価値判断（先入観）に左右される。そこを自覚しないで無批判に延命を拒否しようとすると態度に違和感がある。

技術適用の原則に戻つて、ある技術的手段を講じるとき、処置を受ける人が被る害と益を比較して是非を検討するべきである。害も益も絶対的なものではなく、その人の生活や行き方によつて決まるものであるから特定の技術的手段を一般論では認したり否認したりすることはできない。そのような視点がほんどの番組で抜け落ちているのは大きな問題である。

しかしながら多くの人が「延命措置は無駄」「延命は本人にとつて不幸な」と思い込むのだろうか。かく言う私も母が不測の事態に陥つたとき、医師と面談して延命措置はやめてくださいと頼んだくちである。しかしこれには過去に

遡る経緯があるので、いくぶん回り道になるが本論の趣旨を明確にするため、以下に記述してみる。本論の主題は「老い」と技術の関わりであるが、「死」に焦点が当たられていることに当惑されるかもしれない。先回りして弁明すると以下では、死の瞬間まで生は続くのであり、当人にとって死は存在しないことを述べる。ゆえに死を前提とする「延命」の概念は不当であり、眞実を隠蔽するものと主張する。

死について語り合う

我々は死を知らない。死ぬと体がどういう状態になるかとか、法的にどのような手続きが行われるかといったことは知っているが、生きている者は誰も自分自身の死を体験していないので、死については推測でしか語れない。誠実に語らんとすれば、自分がどのような死を身近に体験し、そのとき何を感じたのか、どう考え方のかを語るほかない。ゆえに書き方が主観的になる。老いや死に対しても技術がどう関わりうるのかということについては個人的意見しか表明できない。その準備として私的な体験を述べる。

私が高校二年生のとき、父が入院して手術を受けた。いつ退院するのかなど思つていたら、ある時、母がやつてきて改まった口調で「すでに気づいていると思うが父は肺がんだ」と告げた。そのような事態を予期していなかつたので大変驚いた。母としては私に予期していくほしかつたのだろう。それが「すでに気づいていると思うが」という前置きに結びついたと思われるが、父親の死は子どもにとつてもつとも困ることなので、そういう不幸が身に降りかかるてくることを予期することはまずないだろうと今でも思う。母も想像する余裕がなかつたということだ。

末期癌で余命半年と言われたが、入退院を繰り返しつつ、父は四年ほど生き延びた。三十年前にはよい治療法もなく、徐々に衰弱していく父を見守るほかなかつた。病院にいることが多く、誰かが昼夜側にいる必要があつたので母と交代で看病したが、休憩時に母と食事しながら、自分だつたらどうするか話し合つた。本人には癌と知らせなかつたので、治療すれば直るだろうと信じている。その分、家族、特に看病している者は苦労が増す。治らないと知りつつ、励ましたり、なだめたりしなければならない。もし癌だとわかつたら告知しようと互いに約束した。治療しても効果がなければ、治療もやめようということ

になつた。

このときのことを振り返ると、延命治療をしないというより、家族の間で嘘をつくのはよくないという気持ちが強かつたようと思う。周りの者に対する本人の不信感は払拭できないから日々、ぎくしやくした関係が続く。真実を皆が共有できたら負担感は軽減できたのではないか。白々しい言葉で無理に励ますのではなく、真実を伝えることで父とはもう少し関係を深められたのではないか。苦しみや痛みに対しても「治るよ」と応対すると、現実逃避にしかならない。それらが不可避なものであると認識して、一緒に対峙できたらもつといろいろなことを話し合えたはずだ。

その時母と同意したのは、運命を受け入れようということであつた。ということが三十年前にあつたので、十年ほど前に母が「くも膜下出血」で倒れた時に、医師には無理に生きながらえさせないことを伝えたのである。その時、応対した医師は通常なら手術で命を取り留められること、予後については断言できないが回復する人もいると教えてくれた。この状態で手術を拒否する人はいないうといふ口調だったので、そうかと自分も納得し、同意書に署名した。

その結果どうなつたかといえば、脳血管障害特有の認知症の症状を呈するようになったものの、人格は保たれ、娘や息子・孫たちの顔を認識し、親しい友人のこともわかり、昔のことによく思い出すといった具合で、本人自身であり続けた。最近の記憶が曖昧、推論は苦手で地下鉄の切符を自分で買えないなどの障害はあつたが、持ち前の人当たりの良さでうまく誤魔化し、不自由はそれほど感じていなかつたように思う。

その母も最期は眠っている時間が多くなり、物も食べられなくなり、判断力も低下して意思疎通困難となり、ある朝、自分の吐瀉物をつまらせて窒息死した。担当医師は「そろそろ胃瘻を勧めようと思っていたのですが」と言つたが、勧められたら悩むこと必至だったので、考えなくとも済んでよかつたと（正直なところ）思つた。

今を生きる

以上が私の体験であるが、延命措置をとるべきかどうか悩んだことがない。安らかに逝ってくれるように願つたこともない。死はそれが訪れるまで予期できない。死は望んでも望まなくても勝手に向こうからやってくる。未だ起きて

いないこと（死）を受け入れることなどできない。想像でしか存在しないのだから。受け入れられるのは今感じている苦しみだけである。本人も含めて周囲は最後の瞬間まで生きるという営為を続けるほかない。父に関していえば死の三十分前になつても死はいまだ縁遠い存在であつた。

「死を受け入れる」とは、死に対する恐怖を克服することを意味するのかもしれない。そういう意味では父も母も闘病期間が長かつたので、喪失に備える時間は十分に与えられた。そういうことなら「死の受容」の重要性が理解できるのだが、そうして死を受け入れたとしても人が生きている現実は続き、その間はいかに生を充実させるかという課題が残る。

正しく死んでいくことはとても重要だ。その間に我々は精神的にも大きく変容していくだろうから。死にゆく過程で栄養を注入するなどの介入がそのプロセスの進展を妨げるものなら忌避されるべきだろう。死に向かって人間が完成に近づいていくというビジョンが共有されれば、余計な介入は控えるべきという考え方になる。そこには「延命」という考えが入る余地がない。

「延命」という表現には、精神活動を終えた人がただ肉体的にのみ存在しつづけるという否定的な見方が込められている。私は周囲の者が当人の様子を見て「精神活動を終えた」と判断することに異議を唱えたい。眠つていてるようにもみえて当人の精神世界では途轍もないことが起きていて、魂の大変容が続行中かもしれない。そのような可能性を否定することはできないと考える。

ここでまた私的な体験に戻る。父が最後を迎える頃、母の疲労も限界に達していたので夜は自分が父の横に控えるようになった。そうすると父がうわごとのようにいろいろなことを話すのが聞こえた。断片的な発言から、父が働いていたころの一こまを体験しているようにも思われた。夢の中で彼は奮闘し、困難な状況を乗り越えようとしていたようだつた。

そういう状態にあつた父と私はなお意思疎通ができる、体の向きを変えて欲しいとか、シャツを直して欲しいとか、水を飲みたいとか言つてゐるのがわかつた。しかし看護婦さんも含めて周囲は父が言葉を話しているとは思えなかつたらしい。「よくわかるわね」と感心されたが、注意深く聞けば言つてゐることがわかるのになぜ聞き取れないのか不思議だつた。私が父の言葉を聞き取らなければ、昏睡状態に入ったと判断されて放置されていただろう。

父との体験を通して、周囲の者が「この人の精神生活は終わった」と判断することの危険性を悟つた。「何も言わない」「反応がない」というのは読み取る

側の問題かもしれない。終末期にある当人がメッセージを送っているのに周囲の者が見落としているだけかもしれないのだ。また何も言わないとしても、当人の精神世界では大変革が起きているかもしれない。

私は父のうわごとを聞いて、やり残した仕事に再挑戦しているという印象を持った。外からみればそれは夢のなかの出来事（空想）かもしれないが、当人にとっては真実の世界である。その体験には重要な意味があるだろう。そのような学びと成長の機会を奪つて良いのかといえば、絶対にそのようなことは許されない。我々にとつての現実を基準として死に向かっている人達の生の質を測つてはならない。死んでいく瞬間も人は生きており、生を完成させようとしていると考える。

死者との交感

「身体とテクノロジー」と題された研究会で話を終えて、もう一人の話題提供者である中島さんととりとめない話をしていて教えられることが多かつた。

「最近、歳をとつたせいか、死んだ人達の世界が近く感じられるんですよね」と私。周りの若い人達からは同意を得られず。研究会後の懇親会場となつた居酒屋の一角にて。どうということですかと中島さんに促されて、祖父母や両親、友人・知人などよく知る人たちが鬼籍に入り、むこうの世界の方に親しい人が増えてきて、こちらの世界よりも親近感を感じることがあるんですと付け加えたところ、日本の演劇はそういう世界を表現しているのですと教えられ、その日の主題はここにあつたのかと思つた。

もうひとつ、この日中島さんが見せた映像で大野一雄氏が踊つているところがあり、背景に流れていた音楽（リスト「孤独の中の神の祝福」）と相俟つて心動かされた。大野一雄氏はすでに世を去り、この世の人ではない。音楽を作曲したリストももちろん亡くなつていて。にもかかわらず舞踏と音楽が心を揺さぶり、彼ら二人が身近に感じられた。上の話題はそこからも続いている。

身近に感じるというのは想像ではない。実感である。上の話で自分が困惑するのも、自分が今いる世界に対しても、死者たちの世界に現実（本当らしさ）を感じるからである。それをどう説明したらよいものか。ひとつには生きている人達よりも死者たちが真実を知らせてくれているという印象による。私はピアノを弾くのが好きで、「孤独の中の神の祝福」も時々弾いてみるのだが、

この曲からは暗い部屋で一人神に祈りを捧げるリストの思い（宗教的情熱）が伝わってくる。そのような強い思念は現実世界で誰も表してくれなかつたもので、だからこそ琴線に触れる。

生きている人に対する現実を感じることももちろんある。日常という意味ではなく、現実を支えている超越的存在に触れたと思われた瞬間である。学生だった頃、私は吉福真逸氏に私淑していて、グループでいろいろなワークに取り組んでいた。ある夜、我々は相方を決めるように言われ、対となつた者たちのひとりが部屋のあちこちに散らばり、もう一人は部屋の隅から出発して目をつむつたままゆづくり進み、相方を見つけたと感じたらそこで立ち止まるように指示された。

私はKを相方と定め、目をつぶつてKが部屋のどこかへ歩いていくのを待つた。しばらくして合図があり、我々は出発した。気配を感じる方にゆづくりと歩いていったのである。気配といつても明確な認識があるわけではなく、ただ何となく「こっちかな？」とおぼろに感じられた方にそろそろと動いたに過ぎない。確信はなかつたが、ある場所で止まり、指示を待つた。

目を開けるように言われ、前を見るとKが驚きの表情でこちらを見つめていた。自分も衝撃を受けた。存在を感じるとはこういうことなのかと知つた。自分の中にそういう能力が潜んでいたことに驚いた。そういうことがあつたのでKとは特別な縁を感じていた。去年、二十六年ぶりに彼の故郷である松山で再会したが、ライフデザイン研究所なる事務所を立ち上げていて、奇妙な一致に再び感心した。私の所属がライフスタイルデザイン研究センターだったからである。（残念ながらKは今年、短い闘病生活を経て亡くなつたが、そのことが死者たちの世界への親近感を増しているように思う。）

生者との交感

西川さん主導、砂連尾さん協賛で認知症高齢者との交流支援に取り組むようになった。これは身体コミュニケーションに焦点をあてたアプローチだが、広くとらえれば認知症高齢者を理解するという当初のテーマに戻つたことになる。つまり認知症高齢者を内側から理解すること、そのために真に出会うことである。「出会い」というのは西川さんや砂連尾さんが言つたり実践したりしていることを私なりに言い換えたもので、意味するところは上で説明したKとの体験

である。気配を感じながらその人に向かっていくことと解説しておく。

Kとの体験は父の看護とも重なる。今これを書いていて気づいたのだが、Kとの体験は父の最期を看取る前だった。徐々に意思疎通が困難になっていく父と最期の六時間前まで「話し合えた」のは気配を感じて対応していくことに気づいたことが大きい。西川・砂連尾プロジェクトではデータをとつてこのようないきな力を解明することを自分の役割と位置づけた。

この仕事は続行中なので簡単に経過報告しておく。存在感とはなんであろうか。私はそれを「只立つこと」と解釈した。存在感と対比されうるのは何かをしている感じ、口語的に表現すれば「やっている感」である。これは手足を動かすことと解釈する。手足を動かしている状態から「やっている感」を取り除くと「ただ存在している」という感じが残るはずだ。それはすくと立つことであろうと考えた。その観点を推し進め、もつと「やっている感」を取り除き、「只座る」ことに落ち着いた。風にそよぐ草花が理想とする存在の姿である。

そのような状態（存在）を何で測るかといえば、座っている人の重心揺動である。バランスボードという装置を任天堂が作っており、これを使うとちょっとした工夫で圧力中心の推移をPCで記録できる。二台のバランスボードをイスの上に並べ、西川さんと砂連尾さんに座つてもらい、二人の圧力中心の変化を計測した。最初に横並びの状態、次に背中合わせ、それから正面向き合った状態、最後に再び横並びの状態で計測した。

二つの重心揺動データの関係を調べるために、フラクタル次元を解析した。計算手法については検討の余地があるが、提案手法で分析したところ、予想通り正面で向き合った状態がもつとも二人のつながりが強かつた。ただ不思議なことに次に高い値が出たのが、背中合わせの状態で、横並びの状態を凌いだ。背中合わせの方が横並びよりもつながりが強いらしいとの結果に戸惑つたが、砂連尾さんによると相手を背中で感じて不思議でないという。ワークショップでの類似体験を教えてもらった。

相手と通じたという感覚がどの時点でききているのかを知りたく思い、これは砂連尾さんと別の人との組み合わせでとらせてもらったデータを分析してみたところ、三分間で一度とか二度くらいしか特異な状態が見られない。分析に失敗したのかなと思いつつ、砂連尾さんに報告すると頻度でいつたらそんなものだと教えられた。そんなものかなとも思われる。

こういうことを九月に学会で話したら、座長を務めてくれた方が（意外にも）

刺激的な研究だと褒めてくれて、さらに似たような話が量子力学にあつたと思う、二つの量子がある瞬間同時に生起して同じ方向に動くとか、そんなようなことだつたかしらん、とコメントしてくれたので再び驚いた。この研究はシンクロニシティに関係するのかなと漠然と考えていたからだ。

まとめ 「運命と偶然」

技術について語るべきなのに、本論がわかりにくい書き方になってしまい、恐縮している。論考を締めくくるにあたり、論点を整理する。生存に関わる技術は二種類あり、それは人の生が運命と偶然に支配されることに起因している。歳をとれば体が衰え、やがて死に至るのは運命であり、避けられない。死期を予測し、備えるための技術は運命に関わる。人ととの間で何か通じ合う一瞬を検出する技術は生の偶然性に関わる。

人の死期を予測し、備えるための技術は、死に逝く人のためというより、後に残される人々のためといった意味合いが強い。社会的にはこちらが重要な年であるが、天気予報と同じで当人にしてみれば雨が降ろうが晴れようが関係のないこともいえる。遺される人たちに迷惑がかからないなら結構というくらいの受け止め方だろう。

人ととの間で何か通じ合うこと、これは最期の瞬間まで重要である。死にゆく人々から我々が学べることは多い。今は我々（元気な人達）の側で意思疎通の努力を投げ出している状態である。それは我々が死に對して否定的な意味を付与していることの帰結である。我々の文化に規定された限界により、死につつある人が精神的に有意義な時を過ごしているかも知れないと想像できない。日本人が長く信仰してきた仏教にはそういう考えが埋め込まれているのだけれども。

そんなことから私が今重視しているのは死にゆく人たち、意思疎通が困難になりつつある人たちとのコミュニケーション支援技術である。そのような技術の重要性が認められるには我々の終末期の捉え方が想像力豊かなものとなる必要がある。「精神活動がなくなつたら安樂死した方がよい」とか「延命治療はやめよう」といった発想からはこういった見方は生まれてこない。運命論に支配されているからである。

運命を否定することはできないから甘んじて受け入れよう。しかし運命に抗

するものが存在する。それが偶然である。仏縁と言い換えるても良い。偶然を生かす機会は我々の側にある。それは生死の境を越えて、死者との交感をも可能にする。そういう技術があつてもよいはずだ。結果は読み取る側の心の世界を投影したものかもしれないが、それはそれで意義がある。そもそも投影と言おうが、靈の世界だと言おうがどちらでもよい。それは主観か客観かという議論でしかないからだ。重要なのは読み取った人が何を得るかである。ここまできてようやく副題の解題に至った。非還元的接近である。（了）